

前期：キリスト教と政治思想

オリエンテーション

1. イデオロギーとユートピア

- 1-1：リクール1
- 1-2：マルクスとマルクス主義
- 1-3：黙示的終末論の系譜
- 1-4：ティリッヒ1
- 1-5：ティリッヒ2
- 1-6：リクール2
- 1-7：知恵思想の視点から
- 1-8：パウロとローマ帝国

2. キリスト教と社会主義

- 2-1：宗教社会主義—ティリッヒ—
- 2-2：宗教社会主義から解放の神学へ

7/24

Exkurs

- キリスト教と仏教1
- キリスト教と仏教2

<前回>パウロとローマ帝国

(1) パウロ・ルネッサンス

- 1. 西洋的キリスト教会の神学的基盤としてのパウロ
- 2. 新しいパウロ解釈：1980年代以降

体制派パウロから戦うパウロへ
政治哲学におけるパウロへの注目

「パウロの神学の社会革命をひき起こす潜在力を秘めていた」「ユダヤ人と異邦人の一体化」（サンダース、24）

「レーニン主義者パウロ」「アウトカーストの共同体」「無制約的な普遍主義への関係にもとづいて形成された戦う共同体」（ジジェク『操り人形と小人』青土社、195）

(2) パウロ——迫害者から使徒へ

- 1. パウロの思想的背景：ヘレニズム・ユダヤ教と都市
- 2. 迫害者から異邦人への使徒への回心（復活のキリストとの出会い）
地中海世界の伝道旅行、都市から都市へ伝道するキリスト教徒と存在
- 3. エルサレム教会・ユダヤ的キリスト教（ユダヤ教イエス派）

とヘレニズム的キリスト教

律法遵守は救済の条件か、救われるためにはユダヤ人になる必要があるか

(3) パウロのキリスト教思想の特徴

- 4. 核心点
 - ・キリストの十字架と復活における神の救済の歴史的活動、摂理
 - ・神の救済活動の一環としての異邦人伝道→自らの異邦人伝道の意義
- 6. 新しい歴史理解＝救済史（旧約と新約の統合）
異邦人の救い→ユダヤ人の救い→被造物全体の救い
- 7. 救済とは何か
 - ・イエスの十字架（死）と復活への参与 → キリスト共に死にそして生きる

神秘主義的あるいは密儀宗教的、法律の意味はむしろ二次的

- ・罪の力からの解放：古い存在から新しい存在への変容・移行

移行は信仰においてすでに始まりつつあるが、終末（再臨）における完成する。

8. 救済に参加した人間は何をするか。

- ・自然な帰結としての倫理的な生活

律法的生は前提ではなく、結果。模範的な市民であり得る。

- ・キリストの体の一体性（教会）への参与

(4)パウロと政治哲学

the great hero of faith who articulated foundational Christian Theology was discovered to share the same fundamental "covenantal nomism" of Judaism,

Paul's new religion of personal faith was no longer seen as sharply opposed to Judaism. (2)

10. 普遍宗教・世界宗教キリスト教への道

民族性を越えて世界へ、市民社会のキリスト教への道???

11. ローマ帝国のイデオロギー

That Paul's gospel opposed the Roman imperial order, not Judaism, becomes increasingly evident the more we reexamine principal facets and key terms of his gospel, as evident in virtually all his letters. (3-4)

Recent constructions of "the social world of the apostle Paul" have perpetuated the standard view that the *pax Romana* provided a benign context for the Pauline mission and rise of "Christianity." (6)

Political stability may have prevailed in the cities where Paul carried out his own distinctive mission, but that stability imposed by the Roman imperial order surely meant insecurity for many if not most urban people. (9)

12. パウロとユートピア

被造物全体の救済、ローマ帝国の環境破壊のイデオロギーに抗して

Robert Jewett, *The Corruption and Redemption of Creation. Reading Rom 8:18-23 within the Imperial Context.* (25-46)

Jacob Taubes Paul's "political theology" as "a political polemic against the Caesars," (25)

<バーバラ・ロッシング(Barbara R. Rossing)>

「新しいエルサレムにおける生命の川：地上の未来に対する環境論的ヴィジョン」

(Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether(eds.), *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000.)

13. 黙示録が提示する、バビロンとエルサレムという対照的な二つの都市のヴィジョン、二つの対照的な政治経済学のヴィジョン。

14. イデオロギー

ローマ帝国の「現実化した終末論」（永遠のローマ、ローマの平和）。

・都市の女性的形姿（人格化）による描写。「その主要な論争は、政治的で経済的であり、性差に関わるものではない。」(209)

- ・バビロンの政治経済学、バビロンの環境破壊。

「バビロンの売春の対する黙示録の批判は、性的ではなく、ローマの搾取的な貿易と経済支配に対して隠喩的に向けられている。」(209)

「奴隷制と奴隷交易に対するもっとも明確な批判」

・森林伐採、「裸の荒地」（17:16）

68-70年のユダヤ戦争についてのヨセフスの証言。ローマは征服された土地を森林伐採した。グローバルな森林伐採。帝国主義と不正義への批判。

・バビロンに対する新しいエルサレム、「もはや海はない」（21:1）

「黙示録は海を政治的に描いている」、「悪の場所」「交易船が航海する場所」、
「もはや海はない」＝「ローマの貨物船と交易の終わり」

15. ユートピア：別の経済的ヴィジョン

・新しいエルサレム：生命の都、新しいエルサレムは環境論的。

「テキストがわれわれに呼び起こすのは、都市的で環境的な危機、グローバルな市場経済の危機のただ中における神への信頼である。」（214）

・地上における神の家、都市生活のヴィジョン：地上からの脱出（携挙）ではなく、新しいエルサレムは「降りてくる」。都市的ミニストリの新しいヴィジョン

・贈与的経済（a gift economy）：生命の水をすべての人に値なく飲ませる。われわれがエコシステムに対してダメージを与えることへの預言者的な批判

・諸民族の癒やし。創世記 3:22 の禁止命令を克服する生命の木のヴィジョン。

都市と田舎の和解。

・新しいエルサレムは未来のためのヴィジョンである。

2. キリスト教と社会主義

2-1：宗教社会主義—テイリッヒ—

(1) バルトの宗教社会主義批判

1. スイスやドイツにおいてなされたキリスト教と社会主義との積極的な関係づけの試みとしての宗教社会主義。クッター、ラガツ

2. カール・バルト：

自由主義神学、ザーフェンヴィルの労働問題、宗教社会主義運動

→ 第一次世界大戦における戦争政策に対する神学者を含むドイツ知識人の公然たる支持、ドイツのキリスト教社会主義の愛国主義運動への転換。

宗教社会主義から弁証法神学への転換：新しい世代の神学者において共有。

3. 「ストライキとゼネストと街頭闘争、もし必要ならば、それらはなされねばならない。しかし、それに対する宗教的正当化や栄光化はなされるべきではない！ ……社会民主主義的に、しかし、宗教的・社会的にはなく（*nicht religiös-sozial*）！」（Barth, 1919, 520f.）

4. 批判の論点：宗教社会主義がその正しさを主張する際に、「キリスト教的」「宗教的」と述べること。「宗教的」と主張することによって、政治という「この世」の事柄を宗教的神学的に正当化しようとするあり方。

「神の判決と審判」、「神の革命」を、あたかも自らの力で（「別の革命」として）遂行しようとするところに、「革命家の悲劇」（Barth, 1922, 464）と不義が存在する。

宗教社会主義における「宗教的」と「社会的」を「宗教的—社会的」という仕方で結合する「ハイフン」が人間の不遜（巨人主義）であるとの批判

5. 『ローマ書講解』の基本的認識：「神は天にいまし、汝は地上にいる！」（*ibid.*, 294）

との神と人間の「無限の質的差異」に基づいている。バルトにおける政教分離原則の徹底化。

6. バルトにおける政教分離原則は、単に国家と教会を原理的に区別するにとどまらず、

むしろ、両者の区別が生じるその根源から、いわば逆説的にキリスト者の政治的実践を生み出すものとなったのである。キリスト教の弁証は、特別な弁証神学によって遂行されるのではなく、神学が真に教會的神学に徹するところにおいてこそキリスト教の弁証は有効になされる。

7. 「この宗教社会主義批判を、単純に、キリスト教と社会主義の宗教社会主義的な一元化に対して、両者の二元化を原理とする立場からの批判であったとみるのは、十分に正しい考察に基づく判断であるとは言い難い。さらにまた、この宗教社会主義批判の背後にあるより根源的な二元論 (Dualismus)、すなわち、神と人間との間に横たわる無限の質的差異に基づく二元論に由来するものとみるのも、適切であるとは言い難い。この『ローマ書』における二元論は、既述のところから既に十分に明瞭な通り、『根源』における一元論 (Monismus in Ursprung) に基づいている。」 (大崎、1987、404)
28. 教会と国家との関係を、神の国とこの世界との関係——神の国の超越性と内在性 (断絶性と連続性) ——というより大きな連関の中で論じることが必要なる (「神の国／教会／世俗社会」の三者関係)。
29. 宗教的社会主義批判と宗教批判 → 人間理解の問題
「宗教は不信仰である」、「神の啓示は宗教を止揚する」というバルトにおける「宗教と啓示」との峻別にに基づく宗教批判 (『ローマ書講解』から『教会教義学』まで)。
↓
バルト以後における宗教社会主義の可能性。バルトの宗教論 (宗教批判) の妥当性の吟味。
30. キリスト教社会主義の限界がその楽観的な人間理解にある、宗教社会主義の問題も、同じ人間の問いへと収斂する。

(2) ティリッヒと宗教社会主義

1. バルトの宗教社会主義批判
↓ 「宗教的」と「社会的」をつなぐ「ハイフン」に対して。
バルトの宗教的社会主義批判と宗教批判との関連
「宗教は不信仰である」、「神の啓示は宗教を止揚する」という「宗教と啓示」との峻別。啓示あるいは神学を、人間的可能性としての宗教から区別する。
2. 宗教が人間の可能性の事柄であるとするならば、この問題は、さらに、人間存在の問い (人間学) に至らざるを得ない。
3. ティリッヒの宗教社会主義論
『社会主義的決断』(1933年)の宗教社会主義論
1919: Der Sozialismus als Kirchenfrage
Christentum und Sozialismus
1923: Grundlinien des Religiösen Sozialismus. Ein systematischer Entwurf.
1932: Protestantismus und Politische Romantik, in: Paul Tillich. Gesammelte Werke. Band II.
1933: Die sozialistische Entscheidung, in: Paul Tillich. Main Works. 3.
Einleitung: Die beiden Wurzeln des politischen Bewußtsein
1. Menschliches Sein und politischen Bewußtsein
Die Wurzeln des politischen Denkens müssen im menschlichen Sein selbst aufgesucht werden.

ein Bild des Menschen, eine Lehre vom Menschen

Der Mensch ist im Unterschied von der Natur ein in sich gedoppeltes Wesen.

die menschliche Frage nach dem "Woher", Geworfensein, der Ursprung

Das ursprungsmythische Bewußtsein ist die Wurzeln alles konservatischen
und romantischen Denkens in der Politik.

die Frage nach dem "Wozu", die Forderung

Die Brechung des Ursprungsmythos durch die unbedingte Forderung ist der
Wurzel des liberalen, demokratischen und sozialistischen Denkens in der
Politik.

Die Forderung, die von dem zweideutigen Ursprung losreißt, ist die Forderung
der Gerechtigkeit..... Gerechtigkeit ist die wahre Macht des Seins. ... Der
Ursprungsmythos darf nur gebrochen, enthüllt in seiner Zweidrutigkeit, in das
politische Denken eingehen.

4. 基礎的人間学：社会的構想力 → 政治思想の二つの系譜

「世界一内一存在」（「自己一世界」、「運命一自由」）「被投性一企投」

「起源一要請」、起源神話とその突破（預言者、ヒューマニズム）→ 起源の両義性
実体原理（形成原理）と修正原理（批判原理）

↓

政治的ロマン主義（保守的あるいは革命的）とその意義

自由主義・社会主義とその限界

↓

宗教的社会主義の課題：社会主義と起源の力の再統合、合理性と非合理性

5. Protestantismus und Politische Romantik, 1932, in: Paul Tillich. Gesammelte Werke. Band II.

6. 「この起源神話的な意識が、政治におけるあらゆる保守的でロマン主義的な思惟の根なのである」（Tillich, 1933, 291）。特に、民族起源神話は、民族共同体の起源を血や地において象徴的に表現し、共同体の自然的な絆を意識可能な仕方で提示する。したがって、共有された起源の意識に依拠した政治的ロマン主義——その保守的形態と革命的形態を含めて——は、「歴史的に制約された政治理論以上」（Tillich, 1932, 209）のものである。

↓

イデオロギー：ここに政治的ロマン主義の力の秘密が存在するのである。

7. 起源神話のイデオロギーに対する批判：預言者的また合理的

預言者は、共同体を担う起源の力の聖性を「当為の審判」のもとに置き、「超越的起源への関わりを人倫的要請の成就に依存させ」（ibid., 210）、これによって、起源神話を相対化する。しかし、「神話的なものが初めて取り除かれたのは、人文主義において、自律の土台の上においてであった」（ibid.）。自由主義、民主主義（議会制）、社会主義——これらは、実体原理としての起源の力に対する批判原理、修正原理に相当する——は、こうした起源の力を破る要請の意識（→超合理的また合理的批判）に基づく政治思想であって、それらは近代の人文主義の成立を前提とした合理的精神性の産物だった。

8. 宗教と政治は、人類史の長きにわたって、常に密接な関係を有してきたのであり、近代的な政教分離論に依拠し、この両者の関係の根本に踏み込まない議論は、政治的ロマン主義の前にあまりにも無力であると言わざるを得ない。

8. しかし、宗教的批判と政治的批判を人間理解に基づいて統合するというだけでは、論

じられるべき問題の全貌はいまだ十分に示されたとは言えない。

1920年代後半における、ティリッヒの信仰的現実主義、プロテスタンティズム論。

形成と批判（実体原理と修正原理、内実と形式）、超合理性（恩恵）と合理性という二組の対概念——信仰的現実主義は、超合理性と合理性の関連において成立する——に従って展開。

この枠組みより、宗教社会主義論を展開する試み。

二組の対概念 → 四つの組み合わせ＝イデオロギーとユートピアの弁証法
超合理的形成、超合理的批判、合理的形成、合理的批判
預言者による起源神話批判＝超合理的批判
人文主義的な起源神話批判＝合理的批判

9. 起源の二重性・両義性：イデオロギーの諸次元

「これは、起源が両義的であること意味している。起源の中には、真の起源と現実的な起源との緊張がある」、「現実的な起源は真の起源の表現ではあるが、真の起源を覆い隠し歪曲するものでもあるのだ。」(ibid., 292)

10. 「真の起源」：超合理的形成（恩恵）から超合理的批判（預言）が生成する動性

↓

キリスト教的伝統における起源の力と社会主義との関係構築という宗教社会主義の課題は、超合理的形成、超合理的批判、合理的形成、合理的批判の四つのものを動的に関係づけことによって遂行可能。

11. 宗教社会主義と社会的構想力の観点から再解釈し、思想的意義を再考すること。

<参考文献>

1. Barth, Karl

(1) *Der Römerbrief* (Erste Fassung, 1919), in: *Karl Barth. Gesamtausgabe, II. Akademische Werke*, Theologischer Verlag, 1985.

(2) *Der Römerbrief* (1922), Theologischer Verlag, 1984.

2. 大崎節郎『カール・バルトのローマ書研究』新教出版社、一九八七年。

『恩寵と類比——バルト神学の諸問題』新教出版社、一九九二年。

3. ドイツの宗教社会主義とそれを含めた当時の政治動向については、次の文献を参照。

Renate Breipohl, *Religiöser Sozialismus und bürgerliches Geschichtsbewußtsein zur Zeit der Weimarer Republik*, Theologischer Verlag, 1971.

Kurt Nowak, *Evangelische Kirche und Weimarer Republik. Zum politischen Weg des deutschen Protestantismus zwischen 1918 und 1932*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1988.

4. Tillich, Paul

Protestantismus und Politische Romantik, 1932, in: *Paul Tillich. Gesammelte Werke. Band II.*, Evangelisches Verlagswerk, 1962.

Die sozialistische Entscheidung. 1933, in: *Paul Tillich. Main Works. 3.*, deGruyter, 1998.

5. バルトやヒルシュとの論争を含むティリッヒの宗教社会主義の諸問題。

芦名定道『ティリッヒの宗教思想研究』（一九九四年、京都大学文学研究科に提出の博士学位）、第二部「キリスト・象徴・歴史」における「宗教社会主義関連部分」（第5章「カイロス論と歴史解釈」）<http://tillich.web.fc2.com/sub6.htm>

芦名定道「ティリッヒと宗教社会主義」、『ティリッヒ研究』（現代キリスト教思想研究会）第11号、2007年、1-19頁。